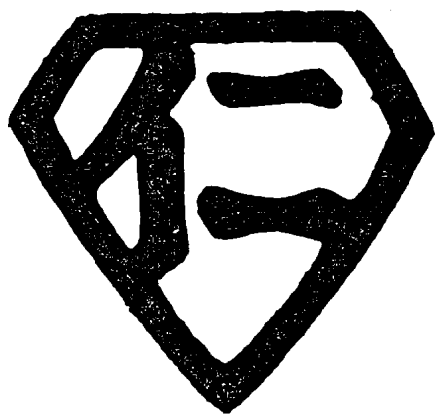


唐獅子超人^{スーパー}伝説^{マン}
小林信彦



文藝春秋

著者略歴

昭和七年東京日本橋両国
生れ。射手座。三十年早
稲田大学英文科卒業。三
十四年から四年間「ヒッ
チコック・マガジン」の
編集長をつとめる。職を
辞してからは、雑文、テ
レビ台本執筆で生活を支
えながら、小説を書く。
主な著書に「冬の神話」
「家の旗」「ピートルズの
優しい夜」があり、長篇
評論「日本の喜劇人」で
昭和四十七年度芸術選奨
を受けた。

唐獅子超人伝説

昭和五十四年六月三十日 第一刷

昭和五十四年八月一日 第二刷

価 八百八十円

著者 小林信彦

発行者 榎原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話〇三二六五一二二一

印刷所 共同印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

目次

唐獅子超人伝説スーパーマン（唐獅子株式会社 part Ⅲ）

第一話 唐獅子暗殺指令

5

第二話 唐獅子脱出作戦

57

第三話 唐獅子超人伝説スーパーマン

111

わがモラトリアム

161

親子団欒図

195

おとなの時間

211

家の中の名探偵

237

鉄 拐

255

消えた動機

281

あとがき

装釘
平野甲賀
画
小林泰彦

唐獅子超人^{スーパーマン}伝説

第一話 唐獅子暗殺指令

—

長い石段を登りきった私は、立ち止り、息をしずめた。

須磨組大親分、須磨義輝の宏大な屋敷の石垣の上には有刺鉄線が張りめぐらされ、何千ボルトだかの電流が通されている。日本の首領と呼ばれる人物だから、これくらいの防禦は、まあ、当然であろう。

私がつじろいだのは、鉄線にひっかかった黒猫の死骸を目撃したからである。いや、厳密に言えば、黒猫ではなく、黒焦げになった猫であって、もどが何色だったかは判然としないのだ。

(危いのう……)

私は白い息を吐き、門の脇のインターフォンのボタンを押した。

——どなたですか？

女中の声である。

——黒田です……。

私は答えた。

——じきに、あけます。お待ち下さい。

女中の声が切れ、大親分の歌声のテープが流れた。

——わしのひとみは100000ボルト

地上に降りた最後の天使イ……

私は紫色の絨緞を敷きつめた広い洋間に通された。

剝製の牡ライオン、唐獅子を描いた鎧の胴、唐獅子マーク入りの特製ステレオといった品々が飾ってあるのは、あい変らずだが、さすが流行に敏感な大親分らしく、弱電機メーカーの△凝縮の思想△を体现したマイクロ・コンポが棚に加わり、その上に、例のブルドッグの首がのっている。残された片耳も、ちゃん切られて、いまや、目鼻口を残すのみの四角い物体の観がある。

大親分の突然の呼び出しが、私にとって迷惑この上ないことは、いうまでもない。

大阪ミナミの情勢は、私が二階堂組組長になっていらいの最悪、戦争勃発直前である。うちの若い者と、島田組の跳ね上り分子とが、のべつ、拳銃を撃ち合って、府警を苛立たせている。この私、黒田哲夫の力をもつてしても、末端の抗争を抑制できるものではない。

須磨義輝が健康を害した噂、須磨組内部の跡目相続問題などが、関西一円で起っている抗争

の根源と、マスコミは報じている。それは、たしかにそうだろう。……だが、私に言わせれば、根本は、大親分の八乗り易さVにあるのだ。この夏の水上スキーとデイスコ狂いで大親分の顔色は生氣を失った。坂津市唯一のデイスコ・ハウスで、十代の餓鬼とフィーバー競争をするなど、正気の沙汰ではない。秋には、来日したオリヴィア・ニュートン・ジョンを坂津市に招いて、二人で華麗に踊りたいなどと言い出し、周囲の者をばらはらさせた。これでは、内部の者でも動揺するではないか。

和服姿の大親分は静かに入ってきた。いつものテーマ曲「坂津の夜は涙色」が鳴り響くこともなく、きわめて尋常な雰囲気である。

「坐ってくれ」

と私に言い、小さなグラスを二つ、棚から出した。

「極上のシェリーを飲ませよう」

「へえ」

私はソファアに腰をおろした。

大親分はシェリーをみたしたグラスを私の前に置き、自分も手に持った。

「……どないな御用です？」

私はたずねざるを得なかった。

「長うはかからん」

大親分は答えた。どうも、いつもと勝手がちがうようだ。

「なんぞ、お祝いごとでも？」

「祝いごとやったら嬉しいのやけどな、黒田。逆のケースや。こないでもせんと、どうにも、やりきれん話でな」

私は緊張した。なにかの責任をとれ、と私に言うのでは……。

「わしは間もなく死ぬ……」

大親分は唐突に言った。

「医者どもも、長うはない、言うとする。おまえにだけ話してきたんだな」

シェリーのグラスを持ち上げて、静かに眺め、やがて一口飲んだ。

「蓮の台で、先に死んだ連中と、こないして酒を汲み交すのがたのしみじゃ……」

私の右手がふるえ出した。シェリーがテーブルに零れた。

「……誤診、ちゆうことはおまへんか？……そや、きつと、誤診でっせ……」

「嬉しいことを言うてくれるのう」

大親分は俯いて、

「ほんま、おまえに話してよかった」

私は何を言ったらよいかわからなかった。

「学然にさえ話したらんのじゃ。……さて、あとを、どないするかちゆうことやが」

「待つとくはなはれ、なんぼ医者がそない言うたかて……」

「医者どもと言うたつもりやけどな」

大親分は私の眼を凝視して。

「そこらは、とことん、考えたある。間違いないとわかったからこそ、おまえを呼んだのじや」

私は呆然とした。

なんと言おうと、須磨義輝あつての須磨組である。二階堂組はもちろん、傘下の各組も、大親分の人柄——流行への入乗り易さVという弱点はあるにしてもだ——に惹かれて、親子の關係を結んでいるのである。……その大親分が……よりによって、この時期に……。

「おまえの考えてることは、手にとるようにわかるよ。……わしかて、不様な真似は見せとくない。悟りすました顔をした高僧が、病名をきかされたとたんに、とり乱したちゅう有名な話があるやろ」

私は深く項垂れた。

「おまえにきてもろたのも、そこよ。わしの最後の戦略じや」

「戦略？」

「おうよ」

「戦略、といいますと？」

「須磨組系の結束を引きしめる手があるのじゃ」

私はシェリー酒に口をつけた。

「哲よ、おまえ、流れ者の殺し屋にコネクションがあるやろ」

大親分の蒼ざめた顔がかすかな笑いに歪んだ。

「そらまあ、ない言うたら、嘘になりまっしゃろな」

私の声は低かった。

「思おもた通りや……」

「へ？」

「不死身の哲という渾名は伊達やないのう」

大親分はシェリーを私のグラスに注いで、

「二、三人は必要やろな」

「え？」

「なんせ、ここは、一万ボルト近い電流に、県警の張り込みや。うちの組の命知らずどもも、ぎょうさん待ち構えとる。須磨義輝の守りは鉄壁じゃ」

「そら、よう、わかってま……」

私はシェリーを飲んだ。飲まずにはいられない気持だった。

「その守りも……はかないもんですなあ、おやっさん」

「泣き声出す奴があるかい」

大親分はからかうように私を見て、

「この鉄壁の中におるわしを標的にできる者がおるか、謎をかけとるんじや」

「標的？ おやつさんをでつか？」

「驚くことはないぞ、黒田」

大親分は声を低めた。

「わしは最後の戦略やと言うたやろ。わしが撃たれてみい、こっちの結束は完全になる。それに、反須磨組系の団体には世論の風当りが強うなる。わしは俠道に生きる男として人生をまっとうでける……」

「けど、それは……」

「生きたところで、ひと月、と医者と言うとった。わしも生き身の人間じや。ほんま言うたら、死の時がくるのがこわい。——というて、自殺する勇氣もない。それに、やりそこのうたら、天下の喰いもんや。東条英機が、そやったやないか？」

「えらい古い譬えでんな」

「古い男やからな、わしは……」

大親分は自嘲した。私には、そんなに古い男／＼とも思えなかった。

「わしが傭うた殺し屋がわしを撃てば、自殺といっしょや。——多少、苦しい理屈やけど、そ

ないに考えたんじゃ。……それも、一人やったら失敗ちゆうこともある。腕の立つ殺し屋が三人は要るな。……どや、わかるか？」

「へえ……」

私は釈然としなかった。

「ええか、哲、親がこないしてたのんどるのじゃ」

「へ……」

「どないやねん？」

「親殺しに手エ貸すいうのは、わたしは……」

「悩む時やないよ、もう。わしは死ねる、味方は結束できる——いうたら、一石二鳥や。……そのためには、あつ、と思う間もなく、わしを殺せる男が必要なんじゃ」

「話の筋はわかりました」と私は答えた。「けど、わたし、そないにドライにはなれまへん……」

「一日、二日を争うわけやない。一週間したら、おまえとこの口座に三千万円ふり込む。殺し屋一人あたまで、一千万ちゆうわけや。どや？」

「さいきんの相場は知りまへんけど」と私はためらった。「相手がおやつさんちゆうたら、二の足踏むでしようなあ、どいつも……」

「焦ることはない」と大親分は言った。「それから、間違うても、他言は無用やで。知ってるのは、おまえだけや。ええな？……」